

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O

支援のまなざしを育みながら 福祉の現場から生まれる 未来のアートを発掘・発信！



今年度も「埼玉県障害者アート企画展」を中心に4つの連動する
展覧会(作品展×3+グッズ展×1)を開催しました。福祉施設で表
現活動の支援に取り組むTAMAP±Oメンバーが、月1回の定例
会で話し合い、企画から運営まですべて協働で行っています。

この展覧会の実践では、単に展覧会の手法を学ぶのではなく、
「この表現の魅力は何か」「何のための展覧会か」「アートとは何
か」と、常にみんなで考えることを大切にしています。

作品展では、キュレーターである中津川浩章さんのファシリ
テーションのもと、表現活動をしている障害のある人たちの、創作
の様子や支援の関わりなどを語り合いながら、一人ひとりの表現
の魅力を探り、アートの可能性を秘めた表現の発掘・発信に取り
組んでいます。その過程で表現とじっくり向き合い考えることが、
作者と向き合うこと、表現を生む福祉の現場の「支援のまなざ
し」を育むことにつながっています。

TAMAP±Oの定例会や活動全般でも、それぞれの課題や情
報を共有しながら、その「支援のまなざし」は各現場に広がりを見
せています。

TAMAP±Oの取り組みをご紹介します！

日々の支援につながる展覧会実践

「活動方針」 みんなでつくる！

- 専門家も施設職員もフラットな、みんなで学び合う関係
- 表現する人も支える人も周りの人もみんなが主体の意識
- 表現の魅力・可能性・新たな価値をみんなで探り考える
- それを共有する場をつくり埼玉の強み「連携力」を生かして
障害のある人の表現や支援活動を広める
- 事務局はメンバーが情報共有できるようフォロー
現場の事情に合わせ参加できるゆるやかさも大切にする

TAMAP±Oとは？

県内の福祉施設・事業所が中心となつて様々な専門家や機関、地域
の人たちや行政と連携して、障害のある人の表現活動や支援の輪を
広げています。

「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほ
ど謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも良いところはたくさ
んある。そのうちのイメージを一言であらわすと…

「ブラマイゼロ ±O」

埼玉県は「ブラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に
「埼玉をもっとアップ(向上)させたい」「県内のつながりをマッピン
グしよつ」という想いを合わせて「TAMAP±O(タマップブラマ
イゼロ)」と命名しました。

謙虚で控え目な中に様々なものを良しとする懐の深さ(ごちゃま
ぜ上等！)を持ち合わせている。そんな埼玉を盛り上げて行こう！
という想いを込めています。

参加福祉施設

11団体からスタートし、現在、20を
超える団体が参加。詳細は↓P5

体制

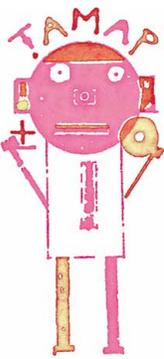
- アートセンター集の事務局でTAMAP
±Oメンバーが連携して活動。
- 東西南北の支部長が地区の情報等
を統括。
- 適宜、協力委員や行政と連携。

定例会

月1回開催。議事録をとり、メン
バーが活動や情報を各施設の職員
とも共有。情報交換の場、展覧会
の企画、セミナーなどの企画を行う。

活動

- 事業計画に即した障害者の表現活動
に関する
- 展覧会の企画・運営。
- 研修の実施。
- 情報交換、悩み相談。
さらに、
- 活動や作家を知ってもらう。
- まだまだこれからの人を発掘。
埼玉県を盛り上げる。
- 想いをのび、県内、そして全国に発信！



いつもここから
スタート!

STEP 0

施設の表現を発掘

表現と向き合い、その魅力を探り、
それを伝え、問うために
様々な人に見てもらおう

Nakatsugawa流Facilitationポイント

表現から感じたこと、読みとれることなどを語ったり、
表現が生まれた背景や作者についてたずねたり…それ
ぞれの表現の魅力、アートの視点などに気づく、
表現や支援のことを語るきっかけをつくる

みんなで作る 展覧会のSTEP

— 表現とじっくり向き合い
 みんなで探り・深め・広める —

STEP 1

コンセプトの検討

何のための展覧会か
 誰に、何を、どう発信するか
 考える

Nakatsugawa流Facilitationポイント

障害のある人たちの表現活動との関わりで得た気づきや考え、アートと福祉の視点の交錯、活動の社会的意義など、障害者とアートに絡まる様々な事柄や課題を共有して展覧会の目的を考えてもらう

STEP 8

振り返り

展覧会での気づきや喜び、
 作者や周りの人たちの
 変化を語り合い、課題を共有
 それらを現場や次の展覧会に
 どう活かすか、考える

STEP 2

開催地・会場・ 会期の検討

作品の魅力を伝えるには
 どんな地域や空間がいいか
 考える

〔TAMAP±Oが大切にしていること〕

展覧会実践を「支援」につなぐ
 アートの視点を学びながら
 福祉の現場や作品の魅力を語り合う

表現活動支援の現場

現場でも表現と向き合い
 その魅力や意味を考え語り合う

作者一人ひとりとじっくり向き合い
 その思いに心を向ける・感じとる

気づきや学びを現場に広げ共有する

支援のまなざしを育む

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O



STEP 3

作品選考

自分の目で評価し、それを語り、
 様々な視点から作品の魅力を探る
 みんなで出展作家を選び出す

Nakatsugawa流Facilitationポイント

自由に選考し、一人ひとりが感じたことを、語り
 受けとめる関係性をつくる。アートと福祉の異なる
 視点や多様な価値観をすり合わせ、その豊かさを
 共有する

STEP +

作家イベント

表現と作者の魅力を広め
 来場者と共有するための
 接点を考え、場をつくる



STEP 7

会場運営・鑑賞支援

来場者・作者・家族・施設職員や
 利用者の感動と声を受けとめ、
 広く分かち合う

STEP 4

展示プラン

見る人に伝えることを
 意識して、展示方法や額装を
 考える

Nakatsugawa流Facilitationポイント

キュレーターの立場から選考結果を踏まえ、アートの
 ・福祉的魅力を総合的に判断する。メンバーが主
 体的に関われる部分を残しながら大まかな展示プ
 ランを作成、意図を伝える

STEP 5

広報・情報発信

展覧会の目的やコンセプト
 作品の見どころなどを伝え広める

STEP 6

作品の展示

見る人の気持ちや他の作品との関係を
 考えながら、展示空間で作品の魅力を
 どう生かし伝えるか、みんなで作る展示

Nakatsugawa流Facilitationポイント

展示のイロハやバランスなどをアドバイスして、作
 業は個々に任せる。最終的な展示を調整し、展示さ
 れた作品を改めて眺め、感じたことを伝え、語るこ
 とを大切に

TAMAP±O定例会・中津川浩章さんによる特別講義

福祉の視点からアートと社会の未来をひろく

— 埼玉独自の展覧会が目指すもの — 2017年5月11日第2回TAMAP±O定例会より



埼玉県障害者アート企画展では、2011年から3年間にわたり障害者施設等の職員がアートディレクター中津川浩章さんのもとでアートマネージメント研修(15回連続ワークショップ)を重ねて展覧会を行ってきました。その取り組みが現在のTAMAP±Oの展覧会実践に引き継がれています。

2回目の定例会では、新たな参加者と共に自分たちの取り組みを確認し、芸術文化活動普及支援事業として展覧会をなぜやるのか、展覧会をつくるとはどういうことか、埼玉として4つの連動した展覧会をどう発信するかを考えるために、①「障害者アート」を取り巻く社会の動き、②美術的・福祉的視点、③埼玉県独自の「障害者アート」の取り組みについて、中津川さんに講義していただきました。

※以下、議事録より一部抜粋・加筆して掲載



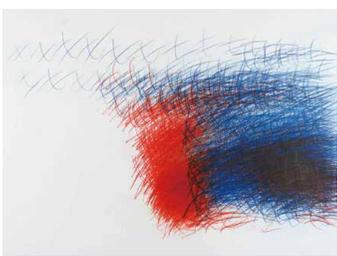
障害のある人のアートは今、世界的に注目を集めています。アートの世界ではアール・ブリュットとして注目を浴びる機会が増え、日本では東京オリンピック・パラリンピックに向けて国や都なども普及を推進し、社会的な関心も高まっています。

アートの源流と障害者アート

一般的に美術は写実的なものと思われがちですが、現代アートには様々な表現形態があり、障害のある人の表現と近い魅力を持った作品がいくつもあります。*以下、スライダを解説。作品画像の掲載は割愛します。

まずは遡って「ラスコーの壁画」。いわば芸術の原点。障害者の表現は、どちらかといえば現代アートよりこういったプリミティブな芸術に近いと思っています。よく見ると馬が首を振った描写や記号なども描き込まれ、彼らなりの「スモロジー」や感じている世界を表現している。「未開」といわれる一方、現在では「知的な美術」とも捉えられています。

これは、ジャン・デュビュッフエの作品です。野生的なプリミティブな感覚を持った



これは、工房集の齋藤裕一さんの作品です。これは、「ドラえもん」の字を重ねている作品。こちらはアメリカの現代アーティスト、サイ・

表現に影響され、描いたものです。彼は、そういった表現には、19世紀後半から20世紀の既存の芸術文化をぶち壊す、人間の深い表現があるとして、既存の芸術文化に毒されていない生(き)のままの芸術「アール・ブリュット」という言葉をつくり提唱しました。自ら精神病院をまわり身銭をきって作品を蒐集し、展覧会を開いた。(近年、アール・ブリュットが、世界で再評価される流れの中、日本では、障害のある人の表現を括る言葉と誤解される広がりがあり、物議を呼んでいます) まずは、本来の意味を理解しておいてほしいと思います。

現代アートとの類似・相違

トゥオンブリーの作品です。こういった「見落書き」の様に描かれたものは、Scribble系と呼ばれています。2人の作品を見比べると、とてもよく似ていますよね。考えていることはたぶん違うけれど、表れているものが似ている。身体的な感覚が強く、原始的な欲求で線を引く、色を塗り重ねる、パッと見ただけでは意味がわからない。けれど、何かグッとくるものがある。

続いて県内の障害のある人たちの作品と、現代アートの有名作家(パウル・クレー、ジャン・ミシェル・バスキア、ジャクソン・ポロック、アンリ・マティス、イヴ・クラインなど)の作品(Minimalism/Action painting/点描など)との視覚的な類似点を、いくつかの事例をあげて解説。アートの視点で作品を読み解きながら、障害のある人たちの創作の様子、障害特性が作品にどう表れているかなどを伝え、現代アートとの違い、障害者の表現がどう生み出されているのか話しを進めていきました。

解説がなければ、障害のある人の作品もすべてモダンアートに見えてくるのではないのでしょうか。それほど、現代アートの方

向性と障害者アートの表現は、視覚的にシンクロしています。

それはなぜか。実は、現代アートの作家たちが、障害のある人の表現にインスパイアされ、様々な形式を生み出しました。一方、障害のある彼らは、そういった画法を教わった訳でもなく、多くは作品という意識で作った訳でもない。自分の内側から表現したものの。どちらかといえば、障害のある人たちの作品の方が、オリジン。起源がある。そして、アートの流れが起源を遡ることに、より、オール・ブリュットなど純粹で力強い表現に注目が集まるようになりました。埼玉でも、世界的に評価される作家がたくさん出てきています。

僕らになじりやすいミニティブな感覚

これは、和田良弘さんの段ボールで作った箱の作品。最初は何を意味しているかわからずに展示していましたが、「これを運ぶときは保冷剤を入れないと魂が起きちゃうよ」といわれ、そんな深い意味があったのかと驚きました。以来、展示の仕方も変え、彼の考えや作品の意味が見えるようになりま



した。彼らの表現、障害のある人たちの感じ方は、ミニティブな芸術と深いところではなっていないかと思っています。

実際、障害のある人の中には、聴覚や嗅覚といった感覚が、僕らより数倍敏感な人がたくさんいます。最初から様々な色を使い描くのは、その様に感じているから。きっと僕らより、世界を豊かに感じている。その豊かさが、表現に反映しているのではないかと思います。僕らの祖先も、そんな感覚を持っていて、現代に生きていたら「障害者」としてカテゴライズされていたかもしれません。

障害のある人は、言葉でうまく伝えられないことで、僕らより劣っていると思われがちですが、感覚的には、僕らよりずっと深いもの、失われたものを持っている。それが作品にも、しっかりと現れている。けれど感覚が強い分、過敏に反応して暴れたりする。そ

れを薬で鈍麻させ、生きている人がたくさんいます。

アートはなぜ存在するのか。きっと人間の本質的な部分をクリアにしてくれるものだからこそ、素晴らしいと尊重される。その人間の本質的な部分、感覚を、障害のある人たちは包み隠さず出してくる。その表現に、多くの人たちがひきつけられているのだと思います。

アートの評価より大切な価値がある

この現代アートの流れや2020年に向けた動きの中で、今、様々な展覧会が催されていますが、そこで評価される作品だけが広まることには、少し懸念を感じています。作品としての評価も大事ですが、長年、障害のある人たちの表現活動の現場に関わってきた中で、障害のある人の表現には、もっと大事な価値、深い意味があるのではないかと考えてきました。

例えば、これは高橋創さんのドローイングです。ぐるぐる、チビたクシヨンで何日もかけて1枚を描き、もう20年近く毎日続

けている。その歳月で、最初の意味とは別の意味が表れてきます。これは、その表現と本人を尊重する支援者がいなければ、こころで深いものにはなりません。

しかし、一見落書きのような Scribble系の作品は多く、展覧会のコンペではまず入選しない。残念ながら20年の厚みや深みは、パッと見ただけではわかりません。もう少し作



品とじっくり向き合った時に、見えてくる世界。でも、そこに大きな意味がある。その価値を伝えることが、大事だと思ってきました。

行為の痕跡「生きるための表現」

これは杉浦篤さんが、ずっと大事にしている写真です。主にお父さんとの旅行の写真で、入所施設の部屋ですと触り続け、擦



れたりしてこの状態になった。彼の大事なもののだからと職員さんが捨てずに保管していたものです。100枚近く、この状態のものがあります。それを見せてくれた時、すごく心動かされるものがあり、工房集ギャラリーで作品として展示し、画集もつくりました。それが、埼玉県立近代美術館の学芸員の前山裕司さんの目にも留まり、「すごいぞ、これは」展に取り上げられたりしています。

もともと表現しようとして作られた作品ではなく、彼が生きている中で、お父さんとの思い出を確認したり大切にしたりしていることが、写真を介して表れ生まれた作品です。そこには、人間にとっても切実な行為、「生きるための表現」が、形になって残っている。それを見た時、アートの概念が崩れる思いでした。世間がどう評価するかわからない。でも、作品としたのは、自分の心が動いたから。そして、その感動のリレーによって、彼の作品がアートになった。そこ

が、とても大切なことだと思っています。とかく問題行動とみなされ、やめさせることを考えがちですが、障害や行為による痕跡の中にも、心が動かされるものがある。「表現」として見た時、それは、彼らの切実な行為だと気づく。それを尊重して、「作品」とした時、それが多くの人の心を動かす「アート」になると考えています。

福祉の視点をもたらすもの

「埼玉県障害者アート企画展」では先進的な試みとして、そういった美術のカテゴリーに収まりきらない作品が、たくさん展示されてきました。「もしかしたらアートかもしれない」といった、一般的な美術より少し広い視点で議論を重ね、展覧会をつくってきました。

施設で作品を選定する際も、美術的な視点だけでなく福祉的な視点から「それが彼らにとつてどれだけ必要なものなのか」、視野を広げて表現と向き合い、感じて、判断する。それにより、福祉的な視点が入った展覧会になる。それが、社会に新たな価値をもたらす。そこが、美術的な視点や評価だ

けでは得られない、とても大切なことだと思っています。



これは、福島尚さんの作品です。一見、鉄道写真の様ですが、記憶だけで描いています。遠近法も確かですが、全部に焦点が合っていないり、部分的に省略されていたり、彼のこだわりや障害特性が作品に反映されています。

彼の作品は、画集にもなっていますが、こういった一般的な美術の分野でも高く評価されている作品と、アートかどうかかわからない行為性の作品とが、埼玉では共存している空間に展示され、展覧会をつくり上げているところが豊か。それが、障害のある人の表現の幅と深さだと思います。

「もっし」の言語「としての表現

障害のある人、特に重度の人たちは、言葉が不自由な人が多く、たぶん僕らより自由も少ない。食事も旅行も一人ではできず、不自由な生活を強いられている。その彼らにとって、絵を描いたりする表現には、どんな意味があるのだろう。自由に振る舞えるのは、絵を描いたり、物を作ったりすることだけかもしれない。その表現とは、彼らにとって「もっし」の言語「ではないのか、と考えています。

一見、同じ殴り書きのようなscribbleの作品でも、一人ひとりの個性やその日の状態などが反映されています。類型的と見るのではなく、一つひとつの表現を読み込んでいくと、一人ひとり、異なる何かを伝えている。共に暮らしている施設職員は、もっと具体的にそれが、読み取れるのではないのでしょうか。

その視点を展覧会に取り込むと、様々な不自由さを抱えている彼らの表現の、切実さも感覚の豊かさもほかの何かも、彼らの全体像が、アートとなって伝わる展覧会になつていくと思つてみます。

施設職員の意見が発信力になる

過去の埼玉県障害者アート企画展のアーTomaneージメント研修(ワークショップ)では、僕が先導するというより、参加した施設職員の意見を吸い上げ、まとめながら展覧会をつくり上げてきました。そうしないと、面白くない。展覧会のタイトルもみんなで考えました。「利用者の表現には、どうしちゃったの、これ」というものがあるよね」といった会話から、肯定的な意味になるよう「うふっ」を付けて「うふっ♡どうしちゃったの、これ!」に。翌年は、そのアンサーの意味で「えへっ。こうしちゃったよ、これ!!」にと、利用者と職員との関係性が表れました。みなさんの日常の視点を反映してこそ、新しい波を起こすユニークな展覧会になる。実際、アート関係の人たちが見に来て、世に出ていった作品もありますが、その発信力は、福祉の現場の意見を取り入れ、生まれたものだと思います。

多様な豊かな表現を生む埼玉方式

また、埼玉が素晴らしいのは、県の「表現

みんなで新たな価値を創る

彼らの表現活動には、いろんな可能性がある。人間とは何か、障害とは何か、そして、社会はどう変わらなうといけないか。いろいろ「問い」がある。だから美術や福祉だけでなく教育など、様々な分野の人がコミットして、埼玉のこの活動のつながりも生まれています。

美術的に評価の高い作品だけを集めるのではなく、社会と一緒に生きる仲間として、みんなで新たな価値を創っていく。それが、「埼玉県障害者アート企画展」の大きなミッションだと思っています。

そして、展覧会だけでなく、アート活動により障害のある人たち一人ひとりの自己肯定感が育まれること、それを共有できる場を設けることも、とても大切です。

福祉の現場は、僕らの暮らしに直結する様々な課題が集まる結節点。そこで起こることは、どれも社会にとって大事なことです。また、そこは、人間の本質的な課題や様々な感情が重層する豊かな場でもある。それらを発信することで、何かが変わる。

そんな視点を持って、豊かな広がりのある

活動状況調査」が、企画展の出展作品を決める選考に絡んでいるところ。作品がどうかかわらない表現も含めて集め、さらに、美術的福祉的視点を交えてみんなで議論して選考する。そこが埼玉の強みです。その積み重ねがあるから、自信を持って世に問える。そして、20以上の施設がTAMAP士Oとして協力して、展覧会に取り組んでいるというのも、全国的には珍しく、大きな強みです。

今、全国各地で障害者アートの展覧会や作品選考会が開かれています。大抵は、美術の専門家による評価です。福祉の視点が評価に反映され、美術専門家と意見を交わし、これだけ多くの施設職員が協力して運営している地域は、まずありません。広く現場の声を吸い上げて取り組んでいるからこそ、作品数も多く、表現の多様性も豊かで、その広がりや深さ、切実さが、クリアに見えてくる。そこが、埼玉は素晴らしい、また、大切なところ。他県では、これを「埼玉方式」として、見習おうとする動きもあります。

展覧会をみなさんにつくり上げることができたと思っています。

現場で感じたことをどんどん投げかけ、主体的に関わりながら、展覧会をつくる。意見がぶつかっても、最終的に「みんなでつくれた展覧会」になれば、有意義な活動になると思つてみます。



表現活動状況調査

「これってアート?」「も発掘!

毎年、多彩な新たな表現を発掘し
 障害者アート企画展の発信へダイレクトにつなぐ
 埼玉県独自の「障害者芸術・文化活動」支援の取り組み

教えてください!!
 ~ 表現活動をしている障害がある方や、その作品の情報募集 ~

何のための調査・・・?

障害がある方の表現活動によって作られる作品の中には、高い芸術性・創造性を持つものがあります。そのような表現活動を発展させることは、障害がある方の社会参加につながります。その一環として、県内の障害がある方の表現活動状況の調査を行います。

8月18日(金)までに御提出いただいた作品は、御本人の同意を得たうえで、障害者アート企画展等の出展候補作品として取り扱います。

表現活動って・・・?

絵画や造形、演劇やダンスなど、何らかの作品を創り出す芸術・文化活動のことを言います。

何を表現しているのかよく分からない作品、これで良いか悩んでいる作品でも、ぜひその情報をお寄せください。

そこに驚くべき才能が隠れているかもしれません。



埼玉県のマスコット「コハトン」

この調査に関するお問い合わせ先

埼玉県福祉部障害者福祉推進課
 社会参加推進・芸術文化担当

T E L : 048-830-3312
 F A X : 048-830-4789
 E - mail : a3110-03@pref.saitama.lg.jp
 http://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hyougenchosa.html

※ 県ホームページのトップページから検索ワード「表現活動状況調査」で検索可能です。

彩の国  埼玉県

障害がある方の表現活動状況調査 調査票(アンケート用紙) 1/2

※本人は、調査票を付いた作品を必ずお持ち帰りください。

※本人の作品の点数、種類を必ず記入してください。

※調査票を記入する際は、必ず「調査票記入の注意事項」をよく読んでください。

※調査票を記入する際は、必ず「調査票記入の注意事項」をよく読んでください。

※こちらが作品の上部となるように写真を貼り付けてください。

この作品3枚につき、1つの作品の写真を含む、説明を記入してください。

作品が多い場合は、この表紙を2ページとして、1人の作品につき1〜2枚程度お送りください。

作品の上下(天地)がわかるようにしてください。

本表紙に作品画像を貼付せず、別紙として添付する場合は、必ず作品の裏面に上下(天地)を記載してください。

TAMAP.O参加施設、団体一覧

2017年度 埼玉県「障害がある方の表現活動状況調査」結果

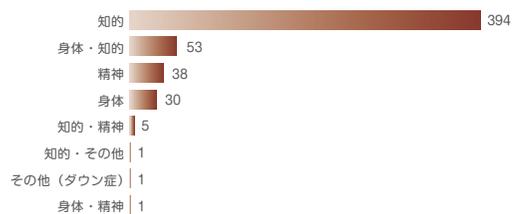
過去5年間の調査回答数推移



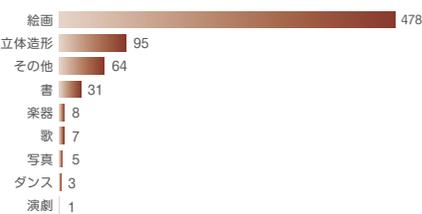
提出回数



障害区分



表現活動の種類



市町村別回答数

市町村	人数	市町村	人数	市町村	人数	市町村	人数
市町村		川越市	17	春日部市	9	入間郡越生町	3
川口市	111	久喜市	16	桶川市	9	鶴ヶ島市	1
上尾市	74	三郷市	14	鴻巣市	8	行田市	1
さいたま市	71	入間郡毛呂山町	14	比企郡嵐山町	7	富士見市	1
新座市	58	比企郡川島町	12	大里郡寄居町	6	日高市	1
蓮田市	34	入間市	11	所沢市	5	飯能市	1
東松山市	28	南埼玉郡宮代町	10	児玉郡神川町	4	草加市	1
熊谷市	25	深谷市	10	比企郡滑川町	3	北本市	1
戸田市	23	秩父市	9	児玉郡美里町	3		

以上63市町村中34市町
 他29市町村は回答数0

埼玉県では、2009年から県内の「障害者の芸術・文化活動」状況を把握するために「埼玉県表現活動状況調査」を行っています。「埼玉県障害者アート企画展」では、この調査で提出された調査票(作品画像)をもとに選考を行い、毎年、新たな表現を発掘。多彩で瑞々しい作品をダイレクトに社会へ発信して「障害者の芸術・文化活動」の支援・普及に努めています。

今年度からは、アートセンター集が県と連携して、選考や調査に伴う作品画像の整理や分析などを行いました。

【調査票のポイント】

「これって作品?」「と悩む表現も大歓迎!

作品なのかわからない、まだ評価されていない、施設側や家族が悩んでいる作品も含めて回答を求めています。

表現は本来自由なもの。アートの捉え方も流動的。芸術の枠を定めない、価値を押し付けないことを大事にしています。

【目的】

多様な表現の発掘!

作品選考会

福祉・美術：多様な視点が交錯する

埼玉独自の「投票&ディスカッション」選考



県の「表現活動状況調査」で提出された調査票（作品画像）をもとに行う、「埼玉県障害者アート企画展」の「作品選考会」では、美術の専門家と福祉施設職員のTAMAP土メンバーが、共に表現について語り合いながら選考を行っています。

単にそれぞれが作品を選ぶだけでなく、みんなでディスカッションする時間を設けて、専門家のアートの視点（見方・価値観）と、作品が生まれる現場の福祉的な視点を交錯。それにより、専門家・施設職員双方に「気づき」が生まれ、表現の魅力や可能性を探求することにつながっています。特に、行為から生まれた表現について「その魅力は何か」「どんな背景があるのか」、多様な視点と深く本質を掘り下げることがつながっています。そして、その議論の中から、共に心動かされるアートの可能性を秘めた表現が掘られています。

今年度は、総勢47名の選考委員で約600の調査票から最終的に97名の出展作家を選出しました。

STEP 1 投票

まずは、自分の目で選ぶ

自分がいいと思った（心が動いた）作品

作品をどう見るか、どう選ぶかは、選考委員それぞれに委ねられています。今回は視線の目安として、作品選考のキーワード（アートの、福祉的、情動的）の提供を試みました。

作品選考のキーワード

【アートの】色、形、レイアウト、発想、コンセプト、造形的、デザインの、構図、構成、線の魅力、類型がない、新鮮…

【福祉的】関わり、背景、障害による表現の違い…

【情動的】心が動かされる、あったかい、かわいい、元気が出る、感動する、涙がでる…

作品選考の流れ

- ①各自持ち票分の作品を選んで付箋を貼る。
- ②得票数ごとに分類し多数票の作品を決定。
- ③決定していない得票数上位の作品の中で推したい作品などをディスカッション。
- ④選考委員の意見と得票数を踏まえて最終的にはキュレーターの中津川浩章さんがコンセプトや展示プランに合わせ出展作品を調整。



STEP 2 ディスカッション

さまざまな視点を交えて語り合う

投票により決まらなかった作品についてディスカッション。自分の推したい作品について「どこが魅力か」「どうして薦めるのか」「どう評価しているか」などを語りました。

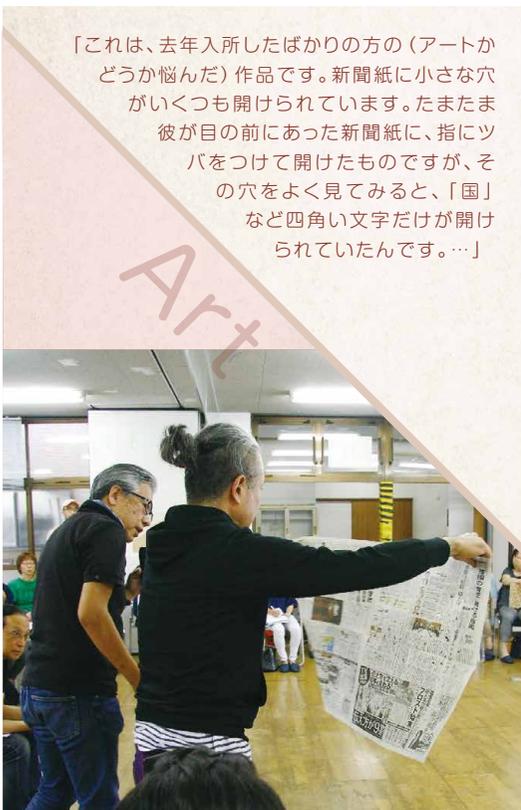
福祉施設の職員からは、担当する作者の表現について、創作の様子や表現が生まれた背景、本人にとってどんな意味があるのか、障害やこだわりがどう反映されているのか、作者の人となりなどについても語られます。

その福祉的な視点が、作品をより深く読み取ること、表現やアートについて深く考えることへ誘い、作品の魅力がさらに見えてきたり、議論や選考が深まったりしています。

「選考委員」47名

- TAMAP士メンバー 38名
- 岩本憲武 弁護士/モッキンバード法律事務所
- 大島健治 埼玉県福祉部障害者福祉推進課主幹
- 大島宗宏 一般社団法人埼玉県セルフセンター協議会副会長
- 小澤基弘 埼玉大学教育学部教授(絵画及び美術教育)、画家
- 酒井道久 彫刻家、埼玉県立大学名誉教授
- 中津川浩章 美術家、アートディレクター
- 根岸章王 埼玉県福祉部障害者福祉推進課課長
- 前山裕司 埼玉県立近代美術館学芸員
- 山路久彦 (社福)みぬま福祉会総合施設長
埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部长

例えば今回は、施設職員の関大友さんと協力委員で美術教育学教授の小澤基弘さんのこんな発言が一つの課題提起になりました。



「これは、去年入所したばかりの方の(アートがどうか悩んだ)作品です。新聞紙に小さな穴がいくつも開けられています。たまたま彼が目の前にあった新聞紙に、指にツバをつけて開けたものですが、その穴をよく見てみると、「国」など四角い文字だけが開けられていたんです。…」

「新聞の穴のことは聞かないとわからなかった。実物が見たいと思いました。(実物を見て)これをどう見るか——。今回行為性の作品が多かったが、私はアートは何か美的なものがないといけません。行為性と美が結びつかないと単なる痕跡になってしまう。そこを見極めることが大事。何か物語や意味があるから選ぶというのは違うと思う。そのことを考えるいい機会になった。勉強になりました。」

TAMAP士メンバーの感想

議事録・アンケートより一部抜粋編集

- 担当する利用者の票に「喜ぶ」憂し、一緒に夢を見ていたような気持ちになった。
- 福祉の現場の人間はどうしても思い入れが強くなるので、美術の専門家の方に見ていただくことがありがたいと思った。
- 客観的な要素が加わり、選びやすくなるように思った。
- 今年は「こうだったのが好き」「もっとみたい」など、これまでと違う視点で見られるようになっていて自分に気づきやすい。
- これに票が入るのかと考えさせられた。
- 行為で生まれたものの中にも美が必要だと聞いて指針にしていきたいと思った。
- 入選しないと怒ってしまう利用者があるが、これだけの数から選ばれることは大変なこと。名誉なことだと伝えたい。
- 選ばれなかった作品にもいろんなヒントがあると思った。
- 施設内で「これはだめだろう」といわれた作品も、調査票を出してみんなにチャンスを与えたいと思った。
- 自分の施設の障害の重い方からも、もっと作品が生まれているに違いないと思った。